

日本大徳寺伝来「五百羅漢図」と史浩の対金政策

近藤一成

はじめに

京都の大徳寺に一幅五人の羅漢を描いた一〇〇幅の五百羅漢図が伝わって来た。現在は、早くに失われ、江戸初期に補作された六幅を除き、大徳寺に八二幅、ボストン美術館に一〇幅、フリーア美術館に二幅の計九四幅がそれぞれ所蔵されている。これらに、寄進文とみられる短い文章が金泥で記されていることは以前から知られていたが、画絹の劣化などにより殆どが剥落し読むことができなかった。しかし、近年の奈良国立博物館と東京文化財研究所の最新技術を駆使した共同光学調査は、ほぼその全容を明らかにした。寄進文のある画幅は全部で四八、寄進者の多くが明州（慶元府、現在の寧波）東の東銭湖周辺の地域有力者で、「五百羅漢図」は恵安院の僧義紹の少なくとも十年以上にわたる勸進によって完成したことなどが分かり、大部な報告書も公刊された。⁽¹⁾

日本大徳寺伝来「五百羅漢図」と史浩の対金政策

九州大学仏教美術史の井手誠之輔教授を中心とした共同研究チームは、寄進文と羅漢図の読解に取り組み、各画面の解釈、勸進の背景、事業の隠れた主宰者が南宋孝宗朝に二度宰相を務めた史浩という人物であったこと、及び寄進者のなかに東銭湖浚渫事業に協力して政府から恩賞を得た人物がいたこと、さらに他の恩賞授与者にも寄進者の同族とみられる少なからざる人物が含まれていたこと、「五百羅漢図」には「水神」や「水官」が描かれるなど、明州鄞県の東半分の灌漑水を供給した東銭湖の「水の恵み」への感謝の想いが込められていたことなどを明らかにした。⁽²⁾

熱心な仏教信者であった史浩の創建した月波寺は、東銭湖西北畔の恵安院に隣接する。孝宗から「水陸無碍道場」の宸翰を賜り、それを扁額としたことが物語るように、史浩は大規模な法会である水陸斎を熱心に行っていた。⁽³⁾ 小論は、「五百羅漢図」のうち水陸斎を描いた一幅を手掛かりに、彼の仏教信仰と政治姿勢との関連について考察するものである。

一 「水陸齋」について

図1は、井手氏が「戦没者供養」(二〇一一年の『大徳寺伝来五百羅漢図 銘文調査報告書』では「水陸会」と題した、五人の羅漢による死者の供養図である。そのなかには甲冑を身に着けた四人の軍人の姿がみえる(一人は三目の異形)。図2「応身観音」には、同じく井手氏によって史浩と宝誌和尚に比定された人物が描かれ、柄香炉を捧げ持つ烏帽の士大夫が史浩、画面中央で礼拝を受ける僧が、十一面観音の化身とされる宝誌和尚とする。前景の三人は、寄進文や他の画面から僧侶が惠安院の勸進僧義紹、及び五百羅漢図を描いた画家で、老人の林庭珪と年下の李季常と確定できる。しかし、寄進文や他の画面のどこにも史浩と宝誌和尚の名はみえない。にもかかわらず二人に比定される理由は、南朝梁の武帝が、夢に見た六道四生の苦悩や地獄に落ちた亡者を救い出す水陸会とどのようなものであるかを諸沙門に問うたとき、対応できた人物が宝誌和尚のみであり、天監四年に武帝臨席のもと水陸会が金山寺で行われたという伝承と、その金山寺での水陸会に感銘を受け、自ら田百畝を喜捨して月波寺に四時水陸道場を建て、儀文を撰述・刊行したという史浩、その二人が合わせて描かれる構図という解釈は、十分納得できるものである。

羅翠恂氏は、千葉照観氏の所説を引きつつ、水陸齋の起源ともい

図1 戦没者供養 解説(『大徳寺伝来五百羅漢図』井手誠之輔)

戦没者供養の場面。香炉を乗せる机を前方に、燭台の灯りのもと、曲衆に倚坐した導師が儀礼文を誦読している。唱和する弟子の一人が見上げる欄干の先に広がる木陰の暗闇には、臙気に立ちのぼる霊雲とともに亡魂の幽霊が出現している。幽霊は戦で横死した人々らしい。笏をもつ高位の人物と鎧をまとう怒髪三目の異形を最前列とし、炎髪の三面六臂で日月を捧げ持つ阿修羅、烏紗帽のような冠を被る高官と、羽状の飾りが上方に伸びた冠をつける夫人、鎧や甲冑を身に着ける三名の武将、二名の文官が続き、周りには鬼たちも蝟集している。惠安院の近隣では南宋最大の水陸道場が営まれていたが、戦没者供養のようすを描く本図は、その活動と深い関係がある。



図2 応身観音(『大徳寺伝来五百羅漢図』)



Photograph ©2011 Museum of Fine Arts, Boston.

える『焰口経』から派生した伝不空訳『瑜伽集要阿難陀羅焰口軌儀経』に亡人への施食が延べられ、戦死者、家族、祖先などの故人を慰撫し供養することが、水陸斎の一つの重要な目的であるとす⁽⁴⁾。

また知恩院蔵宋版大藏経の『大慈恩寺三蔵法師伝』巻六末尾にある

「靖康・建炎」には、南宋の高宗が、北宋滅亡期の宋金戦争における戦没者のため水陸大斎を行ったことを記す。『建炎以来繫年要録』

八〇、八一によってその経緯をみると、紹興四年九月に淮南の確保を目論んだ劉豫の齊国と金軍は、騎兵を泗州から滁州に、歩兵を楚州から承州（高郵軍）に侵攻させ、高宗は親征を決意する。十月、

承州駐屯の韓世忠は、一旦鎮江に退避したが高宗の親札によって奮起して揚州に戻り、中央では趙鼎の進言によって張浚が侍讀として復帰した。韓世忠が揚州大儀鎮、部下の解元が承州で金兵を破ると

士気は大いに上がり、高宗は臨安を発ち嘉興の崇徳県に至った。繼いで韓世忠から俘虜百八人が献じられ、同時に承州で陣歿した人士への厚い贈恤の要望を聞いた高宗は、戦没した使者の遺骸を收容し

て鎮江府に埋葬し、当地に派遣されていた簽書樞密院事胡松年に水陸斎の挙行を命じたのである。羅氏は、また孝宗も「紹熙元年に臨安の崇福寺で千手観音を祀って水陸大斎を行った」⁽⁵⁾ 記事を紹介して

いる。このように水陸斎は、ときの皇帝によって行われたが、史浩の文集『鄮峰真隱漫録』にも彼自身の水陸斎についての記事があり、前掲注(3)『佛祖統記』三三の記事を裏付ける。卷二三の「福州祈

雨設水陸疏」は知福州であった淳熙元年二月二十一日に、祈雨のた

めに設けた斎で、続く「福州謝雨祈晴疏」一、二があるところをみると早速降雨に恵まれたらしいが、今度は多雨となり晴れを祈っている。同巻の「請倫講師住月波水陸院疏」は、倫講師に水陸斎を行う月波寺への住持を願う疏である。

既に先行研究が述べるように、史浩は水陸斎儀文を撰述し刊行した。南宋咸淳年間に月波寺で『佛祖統記』を編纂した志磐は、隣尊教寺で百年後も宗族三千人が施財置田して史浩撰述の儀文に従い水陸斎が行われたことを伝える。但し、その儀文が専ら官僚のための仕様であったため、貴賤貧富が平等に参加できる新たな儀文が必要との要望に従い、志磐は新儀六卷を撰述刊行し、二十六軸の絵像も作成した。この儀文は、明の株宏が重訂したものが今に伝わり、現代の水陸斎儀文の源流となっている。

後述するように、史浩は孝宗隆興元年の山東出兵策に反対し、その理由の一つとして「彼の無辜の赤子をして、皆な横死の游魂と爲さしめ、快を一時に取り、冤を萬世に含む」ことを挙げる。戦没者、横死者の鎮魂を大きな目的となす水陸斎、水陸斎の挙行に熱心であった史浩、水陸斎と深い関係をもつ宝誌和尚を拝礼する史浩の「五百羅漢図」、そして「水陸斎」図、これらは史浩の反戦論と彼の仏教信仰との強い繋がりを示唆する。前掲注(3)佐藤はこの問題の專著であり、多くはそこで明らかにされているが、以下、より当時の歴史の文脈に引きつけて官僚政治家史浩とその仏教信仰について考える。

二 「養素先生」逸話の伝承

寶慶元年（一二二五）三月の序をもつ『會稽續志』七 雜紀「養素先生」は、史浩と觀音菩薩の化身である異形僧との因縁を記す。これによると、紹興十八年三月、紹興府餘姚県尉で明州昌国県の塩監を兼ねていた史浩は、鄞陽の程休甫とともに觀世音菩薩が示現するという補陀洛迦山を訪れた。最初の潮音洞參詣は何事もなかったが、夕刻再訪したときに洞内を照らす金色の觀音の化身に際会した。寺に帰り日が暮れようとする頃、長身の僧が來訪し、史浩は清要の官を歴し太師に至ること、文潞公のようであること（九十二歳で卒した文彦博は太師で致仕した）、宰相になり官家（皇帝）は出兵しようとするから力を尽くして諫めねばならないこと、二〇年後に越で会おうと言つて去つた。それから二〇年後、乾道四年のある晩、紹興府知事として越に居た史浩のもとに養素先生と称する道人が尋ねてきた。名を名乗らず史浩とは面識があると言うだけである。中に通すと紙を求め「黒頭潞相、重漆萬里之風光、碧眼胡僧、曾共一宵之清話」と大書すると筆を投げ挨拶もせず去つてしまった。史浩は、急いで兵吏を遣わして探させたが行方知れずとなつた。ここで紹興十八年に補陀山で会つた長身の僧と養素先生が同一の觀音の化身であることを悟る。それから更に二〇年後の淳熙十六年、（孝宗が讓位し光宗が即位した恩典により）史浩は太師の位を賜つた。こ

れは史浩自身が述べたことであると『會稽統志』は記す。史浩没年は、この五年後の紹熙五年であるから、享年八十九歳、文彦博の再來という觀音の化身の予言はすべて成就したことになる。同様の記事は『寶慶四明志』や『延祐四明志』に継承され、『會稽統志』編纂は先述のように寶慶元年であるから最も早い記録であるが、それでも史浩没後三〇年以上を経過している。しかし『續志』の雜記の箇所は記事の出典を記しており、二項後の記事に「竝夷堅志」と注するから、現行『夷堅志』には見えないが「養素先生」もそうなのであろう。であればその編者洪邁は同時代人であり、また補陀山に史浩と同行した程休甫は同じ鄞陽の同郷人、洪邁自身が紹熙二年に紹興府知事として赴任して（『嘉泰會稽志』二 太守）いるので、史浩自身から聞いたかどうかは別にしても、史浩の觀音靈驗譚が早い時期に広まっていたのは確かであらう。『鄞峰眞隱漫錄』二三の「代補陀山化縁起殿勝瀾長老」は、補陀山の寺殿再建の寄付による結縁を勧める勝文で、瀾長老（寶陀山寺弁至瀾禪師「佐藤」二四九頁）に代わつて執筆した文であり、瀾長老とはかつて補陀山寺で懇談している。史浩が、早くから補陀山寺と関係が深かつたことは事実であらう。

『會稽統志』「養素先生」の記事は、二つに分けられる。一つは、紹興戊辰（十八年）三月に、程休甫と共に補陀洛迦山すなわち舟山群島普陀山の潮音洞を訪れ、觀音の示現に際会した話である。これは、『延祐四明志』一六 寶陀寺の項に「越王留題」として収録され

る記事に相当し、そこには「史浩が見聞したことを寺の壁に書し、今、それを石に刻んだ」とあり、本文にも「此の話の傳わる無きを懼れ、用て壁に書す」とあるから、史浩自身の手になるかと考えてよさそうである。文集には収録されていないが、『全宋文』は『重修普陀山志』三や『延祐四明志』一六、『普陀洛迦新志』三から「遊四明觀音峰潮音洞記并偈」の題で偈文を加えて史浩一九に収載する。一方、後半の「天將に暮れんとするに、一長僧の來訪する有り」以下、後の政界での史浩を予言する部分は、淳熙十六年の太師賜与後に過去を振り返り自ら述べたとして伝承された部分である。このなかで唯一具体的な政策に関する事項が、「它時、宰相と作り、官家、用兵を要むれば、切に須く力めて諫すべし」であり、山東出兵反対が彼の官僚政治家としての経歴のなかで最も重要な課題の一つであったことを示す。では当時の状況と史浩の対応は、具体的にどのようなものであったのであろうか。

三 張浚の「山東出兵論」と史浩の反対論、及び符離の大敗

この間の対金関係の動きを簡単にまとめておく。紹興和議以降、しばらく続いた宋金間の和平は、紹興三十一年九月の金主亮（海陵王）の軍六〇万（号して百万）の南侵によって破られた。しかしクレーデータによる帝位篡奪や急進的な中国化政策、反対勢力の殺害、契丹

日本大徳寺伝来「五百羅漢図」と史浩の対金政策

の反乱などで求心力を欠いた亮は、十一月、渡江を前に采石磯の戦いで敗れ、なおも揚州に布陣して渡江を試みたが部下に殺害された。和議が模索される一方、金軍との局所的な戦闘は止まず、十二月に臨安を發った高宗は、鎮江から三十二年正月には建康府に至り二月まで滞在した。戦闘が続くなか、小論に関係する出来事が相次いで起こる。先ずは張浚の中央への復帰である。紹興七年、軍閥劉光世配下の軍を自らの指揮下におく措置を強引に進めた結果、精銳部隊四万が劉豫の齊国に寝返ってしまった所謂「淮西之變」によって高宗の信を失い、その後の秦檜専政もあって永く地方に逐われていた張浚が、觀文殿大学士を復され、知潭州、すぐに判建康府兼行宮留守に移り、建康に高宗を迎えたことである。復活した老臣は、建康府・鎮江府・江州・池州・江陰軍の兵権を握り、中央政界に再び重きをなすようになった。次に、三十二年六月四日に建王は正式に皇太子となり、同十一日には高宗の讓位によって皇位に就いたことである。⁽⁸⁾建王時代から二王府教授兼直講であった史浩は、立太子とともに起居郎兼太子右庶子となり、孝宗即位に伴い中書舍人、翰林学士・知制誥を拝命した。

建王の立太子は、史浩の教導が大きかったとされる。その一つに、海陵王南侵の際、建王は自ら兵を率いて前線に赴くと奏して高宗から評価されたが、史浩は、太子が兵権を握ることで王や皇帝と確執が起こった例として「春秋」晋の申生、唐肅宗靈武の事」を挙げ諫めた。建王は納得し、高宗親征への扈蹕の願いに改めた。最初、

高宗は怒ったが、奏文を読みその内容に感心し、それが浩の筆と知ると、「これが真の王府の官である」と褒め、建王は先駆けとして建康に赴くことになる。この皇子出兵の阻止は、反戦論と直接の関係は無いが、物事を深く読み込み、結果を見通した上で慎重に対処する、彼の官僚政治家としての資質、基本的態度をよく示す例である。

金との戦闘が続く中で即位した孝宗は、局面の打開に積極的であり、張浚を重用し提言を求めた。その結果、『宋史』三三六「張浚本伝」に「浚の規畫する所、浩必ず之れを阻む」とあるように、隆興元年五月十五日に史浩が宰相を罷めるまで、対金政策で二人は悉く衝突し、孝宗は主戦論者の張浚に傾いてゆく。金側が淮水以北の海州、泗州と西の鄆州、商州の確保と歳幣の履行を求めるのに対し、淮北から更に北半の回復を狙う張浚は、史浩が長江沿いの瓜洲と采石に防衛拠点を築く案を、金に北半回復の意図が無いという誤ったメッセージを送るとして前線の泗州築城を主張した。隆興元年正月に史浩が尚書右僕射・同中書門下平章事兼樞密使、張浚が樞密使・都督江淮東西路軍馬となり両者の対立は頂点に達する。一進一退を続ける戦局を前に、張浚は川陝の呉璘軍を支援するために山東への出兵を建議する。金は川陝攻略に集中し、山東は手薄であり、さらに山東の忠義の士は、宋軍が来攻すれば必ず呼応決起し勝利は容易であると主張した。何やら建炎四年、若き張浚が江南での戦いを援護するとして、諸將の反対を押し切り四川から長安へ大軍を進め富平で

大敗した事例を想起させるが、今回は門人の王大寶、胡銓、王十朋、汪應辰、陳良翰などが賛成し、当初、反対したのは史浩のみであった。『文集』七「論未可用兵山東劄子」は、そのときの上奏文である。

その存在すら不確かな山東の忠義の士の蜂起を前提に、荆・襄や行在周辺の防備を薄くして大兵を動かす危うさについて述べる。その後、金への和・戦・守、の三通りの対策のうち守で共通する現役の武將陳敏、張浚子飼いの李椿、道学系の韓元吉、秦檜に靡かなかつたといわれる唐文若、陳俊卿らも反対論を提出した。先述したように、上奏文の最後の貼黄で「若乃諸將の銳氣に順い、無用の空城を取むるも、寇去らば則ち賞を朝廷に論じ、寇至らば則ち形を山寨に歛め、彼の無辜の赤子をして、皆な横死の游魂と爲し、快を一時に取り、冤を萬世に含ましめん」と述べるのは、単に出兵による勝利が覚東ないのみならず、無謀な作戦で大量の犠牲者を出すことへの憤りが彼を突き動かしていたからであろう。「再論山東劄子」は、孝宗が山東出兵策を放棄したと思わせるような書きかたをしている。しかし張浚は諦めていなかった。金が泗州に大軍を集結させ南攻を企てているという情報をもとに、大規模な先制攻撃をしかけたのである。

隆興元年の対金戦争について孝宗や張浚、史浩の間での論争を比較的詳しく伝える史料は、南宋末元初の人である周密の『齊東野語』二「張魏公三戰本末略」である。周密は、道学批判の言で知られ、ここでは張浚が主導し、いずれも惨憺たる結果を招いた「富平之戦」

「淮西之變」「符離之師」を論評するが、符離の戦いに最も多くの頁を割いている。⁹⁾張浚の主張である「中原の地を一寸も回復できていない現状を打破せねばならず、出兵すれば、中原の豪傑たちが応じて蜂起する」に対し、史浩は「動員できる軍は二十万。うち江淮防衛に充てる人数が十万。輸送と護衛に各二万当てると山東攻撃の動員はわずか六万。山東は金の中心地ではなく、たとえそこを取ったにしても金の主力は無事で、それらが両淮・荆・襄に攻撃をかけてきたらどのように防備するのか」というほか、軍事費の問題、張浚四十年の名声も今回失敗すれば地に落ちてしまうなど、五日間にわたって試みた張浚説得の様子を記述する。最後に浚は「史浩の考えを撤回させることはできない。このままでは機会を失する」として孝宗に決断を迫り、孝宗は三省・密院を経るという手続きを取らず、諸將に直接出兵の命令を下した。周密は、それ以降の戦況も詳しく記す。¹⁰⁾その中で興味深い記事を残している。出兵を知った徳壽(高宗)は、壽皇(孝宗)に、「張浚の虚名を信ずる勿れ。將來必ずや大計を誤らん。他は専ら國家の名器・財物を把り、人情を做すのみ」と評したという張浚への不信である。三省を経ず出兵が決められたことに史浩は反発する。「吾屬は俱に右府を兼ねぬ。而して出兵、聞くに與らざれば則ち焉ぞ彼相を用いんや」として宰相を罷め、知紹興府に転出した。辞職に際し「願わくは陛下、審らかに事勢を度り、若し一たび失するの後は、恐らく終いに復た中原を望むを得ず」と述べたという。

日本大徳寺伝来「五百羅漢図」と史浩の対金政策

張浚は揚州に至り、江淮の兵八万のうち動員可能な六万の兵を淮東招撫使李顕忠・同副使邵宏淵に分け二十万と号して、李顕忠は濠州定遠から、邵宏淵は盱眙から淮水を越え宿州の靈璧県、虹県を恢復した。しかし内部の不和や指揮系統の混乱から宿州符離で大敗を喫し、一夜にして兵や丁夫十三万を失い、兵器や軍糧を遺棄して士卒は潰走した。周密は、張浚がこの敗戦によって急遽和議を乞い致仕を願ひ出たこと、孝宗は「方に敗れて和を求む、是れ何の舉錯ぞ」と激怒し、「朕、明は以つて萬里の情を見るに足らず、智は以つて三軍の師を擇ぶに足らず、號令既に乖い、進退律を失す」と悔やんで「己を罪する詔」を下したとする。張浚は、一旦、降格されるも衆議によつて直ちに宰相に復帰する。すると和議に反対し、再び大軍の出勤を提議したが、さすがに孝宗は従わなかった。周密は、最後に張浚に批判的な記事をいくつか引用し、その一つ『何氏備史』には「張魏公、素より輕銳好名、士の稍や虚名有る者は牢籠せざるなし。……符離の敗るるに及び、國家平日の積む所の兵財、地を掃いて餘無し。乃ち殺傷相等しきを以つて辭とし、行賞轉官虚日無し。隆興初年、大政の事、符離の事に如くはなし。而れども實録・時政紀並びに一字の之れに及ぶなし。公論安くに在りや。……」とある。確かに『宋史』孝宗本紀には、「李顕忠・邵宏淵軍、符離に大潰す」とあるのみで、張浚本伝に至っては敗戦の直接的な表現すらない。逆に「宿師の還るや、士大夫の主和する者、皆な浚の非を議す。孝宗、復た浚に書を賜いて曰く、今日の邊事、卿に倚ること重きを爲

す。卿、人言を畏れて猶豫を懐くべからず。前日、事を擧ぐる初め、朕は卿と之れに任り、今日、亦た須らず卿と之れを終えるべけん」と、孝宗が主和論者の非難から浚を守り、相変わらず信頼の篤かったことを伝える。以後、金との局所的な戦闘が続く中、和議の条件をめぐっての綱引きが続く。金は紹興和議に戻すことを主張し、宋は淮水以北の泗州・海州と南京路の唐州・鄧州は奪い返した故地だとして領有を譲らなかつた。宋金関係の規定についても誓書内で両者を皇帝と表現し叔姪とするか、歳幣数量の維持あるいは減額、逃亡者や捕虜の扱い、欽宗梓宮返還の問題など多岐にわたり、張浚など主戦派は、金の提案を拒否する強硬論を展開し、和平派は、これ以上の戦争継続は国力から無理であるし無用な犠牲者を増やすだけだと妥協を主張した。史書では声高な強硬論が目立つが、隆興二年八月の張浚の死によって、結局、十二月に宋遼間の澶淵の盟に倣い、兩國は叔姪関係として皇帝号を使用し、歳貢は歳幣に改めて十万額を減じ、国境は紹興和議の如くすることで決着した。金の僕散忠義が最初に和議の条件を提示した時、『朝野雜記』は「史丞相の位に在るや、嘗て魏公（張浚）と議するに、弟姪の禮を以つて之れに事えんと欲す（書は鄆峰漫録に見ゆ）。是に至り頗る其の説に合す」と記している。これが史浩の先見の明を述べているのか、あるいは道学系の李心傳としては、張浚派が主張するように、金の主張を先取りした秦檜を連想させるよう示唆しているのか、解釈は微妙である。ただ後者の見方は少々穿ち過ぎと思う。

『四庫全書提要』別集類二の史浩『鄆峯眞隱漫錄五十卷』には、孝宗が張浚を任用し、銳意用兵するにあたり、史浩が独り反対し、遂に罷免されたとし「元代史臣の浩傳贊を作るに亦た頗る其の恢復の謀に贊襄する能わざるを誡する。今、集中を考ずるに「論山東未可用兵」「論歸正人」「論未可北伐」「回奏條具弊事」の諸劄子、皆な李頤忠・邵宏淵の輕脱寡謀、宜しく輕舉すべからずして士卒を練り資糧を積み、力を十年の後に蓄うるを極言す。既にして淮西奔潰し、其の言竟に驗わる。老生謀國の見に非ずと爲すべからず。云々」と史浩の見解を高く評価する。しかし、周密や『何氏備史』のような張浚批判は少なく、まして『四庫提要』のような史浩評価は更に稀である。その理由はどこにあるのであろうか。

四 史浩批判とその背景

孝宗が三省を無視し、淮北への出兵を敢行したことに抗議して、史浩は宰相を辞したが、そのときの侍御史王十朋の弾劾文は、後世の史浩評価に少なからざる影響を与えたと思われる。史浩が中書舍人であったときに推薦した人物のなかに王十朋も含まれていたが、彼は紹興二十七年の状元であり張浚主導の主戦派の一員として、史浩弾劾の先頭に立った。王は四十六歳での科擧合格であり、官界での目覚ましい功績はないにもかかわらず、福建建陽の書肆が、仮託を含め「王状元」の敬称を冠した書物を多く出版したことや、朱熹

の賞揚によってその名声は定着し^①。弾劾の内容を少し詳細に紹介すると以下のようである^②。

①太上皇帝（高宗）が欽宗の計を聞いて哀悼の意激しく、親征を決意して国恥を雪ぐようとされたとき、孝宗の出兵に腹心でありながら反対して和議を唱え大計を妨害した。これは秦檜に倣おうとしたものである。これは懷奸の大罪にあたる。

②太上皇帝は海陵王の盟約違反に憤激し、戦場を爪牙の臣に託した。大将呉璘らは碎骨奮戦して秦・隴州の領土を回復し、たとえ中原は奪回できずとも金の更なる南下を防ぐことができる情勢になったにもかかわらず、浩は呉璘の進取を恐れて、西夏と連携した攻撃があるとデマを飛ばし撤退を命令した。ために奪取した十三州を放棄するに至った。これは棄地であり、棄民であり、棄信である。浩は己一人を売り込むために国家の大計を顧みなかった。これは誤国の大罪にあたる。

③浩の官歴は浅く、徳望は軽いのに急な要路への登用で天下の失笑を買っていた。立場を利用して、多くの人物を推薦して党派を形成した。「嫡子・嫡孫の號、親姪・過房の称有り。密傳・心印を號する者有り。正法眼藏の名を號する者有り。宗派に居るを名とす布く朝列に在る者、紛如たり」これは植党の大罪にあたる。

④朝政に参画してより大権を盗み、宰相や同僚は目に入らず、人はその凶焰を恐れて質そうとしない。官爵・科第をばらまき、官僚の進退を自由にする事右僕射になってからさらに激しい。自分

に異なるものは手段を尽くして排除する。陛下がその奸を察して権力をご自身に回収しなければ朝廷の禍は止まるところが無い。これは盜権の大罪にあたる。

⑤孝宗の即位の初め、求言の詔が出され、忠臣義士が上言したが、浩は讜言を抑え、上達させなかった。逆に己に阿諛する者には免解を与えた。省試の知挙三人は、お上の御心を体して時事の策問を作成したが、浩は自分を斥ける意図を窺い、手下の林安宅を使って「雕匠」を逮捕し板を毀たせた。三知挙はその事をお上に訴え、刊行が命じられたが安宅は陰險な人物で、浩の有ることを知り陛下を知らず、聖旨に従わず浩をのみ是とする。遂に当初の策問は印刷されなかった。これは忌言の大罪にあたる。

⑥高宗は、天下の人望が集まる張浚を建康知事に任命し、江淮の重任を付した。また枢密に抜擢した。浩と浚は氷炭の間柄で、浩は浚の成功を懼れ、悉く妨害した。史正志を建康に遣わして、浚の進取の計を阻み、中央に戻ってくると郎官を与えるのみで、百官に言事が求められた機会を利用して正志に密かに非難させた。これは蔽賢の大罪にあたる。

⑦浩は、同僚の上奏のときには必ず同席し、退出後は、妄りにこれは聖旨だと称して人を欺く。参政（副宰相）を辞任したときの上奏でも祖宗や太上皇帝の徳をたたえる字句は一切無かったが、退出すると教語を書き加え嘉納された、と言う。昔、王欽若は上奏するごとに数通の上奏文を懐に入れ、そのうちの一本だけを出し、

他のものも已に聖旨を得た、と称した。これに対し馬知節は帝の面前でその奸を論じた。史浩は今の王欽若であるが、馬知節がいない。これは欺君の大罪にあたる。

⑧陛下は即位の初め、太上皇帝が太学生の内籍久しい者に免解を与えたとき、浩はその恩典が自分（の願ひ）から出たようにして学生に恩を売り籠絡に努めた。ところが太学生が自分を議論するようになるとこれを阻止した。太学の問題があることが議論になつたおり、臣（王十朋）は「子産、郷校を毀たざるを以つて（廢校の不可を）論じた」が、浩が言うに「自分はそのような考えはなく、ただお上がお怒りになっているだけだ」と発言。景靈宮参詣のとき貢院を経由した。ちょうど入学試験が行われており受験者が溢れていた。鄧王は車を遠回りさせて避け、聞いた者を賛嘆させた。浩は威厳を見せびらかせ士人から嘲笑された。さらに言うには「お上は受験生の混乱を思い煩ひ、入試を中止させようとしたが、それを思いとどまらせたのは自分だ」と「善則稱己、過則稱君」とする。これは訕上の大罪にあたる、と具体的に八箇条をあげて弾劾したのである。最後に「浩、宰相の才無くして、具瞻の位に居り、堯・舜の主に遇いて、共・鯀の凶を懐く。陛下、方に賢を任じ能を使用して、大業を圖治するに當り、如し浩輩をして久しく廟堂に在らしめば、其れ以つて中興の治を望むべけんや。臣、願わくは陛下其の罪惡を正し、之れを遠方に竄し、以つて天下の心を快とし、以つて羣臣の戒と爲さん」と結ぶ。

史浩は尚書左僕射を罷め、觀文殿大学士知紹興府に任命されたが、王十朋は、「再論史浩劄子」を上呈し、紹興府が首都に近い大藩であり、以前の任官地でもあるので、史浩のような悪人の任地としてふさわしくない、さらに僻遠の地に追い出すべきであると畳みかけ、史浩は祠祿を願ひ出た。以後十三年間、史浩が出仕することはなかった。

王十朋の激烈な史浩批判に「裏書き」を与え、評価を定着させたのは朱熹であろう。『宋名臣言行録』別集下卷三 張浚は南宋末の李幼武撰であるが、「史浩、議して瓜洲に城せんと欲し、公議に下す。公（張浚）云う、兩淮を守らずして江干を守る。是れ敵に示すに削弱の形、軍民戦守の氣に怠るを以つてす。先に泗州に城するに若かず、と。浩既に祭政たりて、公の規畫する所、浩必ず之れを沮む」と『宋史』張浚本伝に引かれる文を記す。『朱氏語類』一三 本朝七夷狄に、「泗・海・唐・鄧州は、皆な西京・中原を取るべきの地である。海陵王南侵の戦争で、一時これら四州を回復したのに、湯思退が故なく之れを与えてしまった。惜しいことであつた」と述べ（¹³）ているから、『言行録』は、朱熹の考えと同じとしてよいであろう。そもそも朱熹の張浚への思いは、その個人的結びつきによるところが大きい。張浚の息子桴は、いうまでもなく朱熹と切磋琢磨するライバルであり畏友であつた。さらに紹興の初め、張浚が蜀を保全した功績は、幕下の劉子羽の働きによるものであつた（¹⁴）という。まだ無名であつた吳璘をいち早く見出し、參謀として、あるいは陣頭指

揮で張浚を支えた子羽は、富平の敗戦、淮西の変の責任を問われた張浚が下野したとき、同じく降格された。その後、故郷の福建建陽に帰った子羽に、任地建州の官舎で病床にあった朱熹の父松は、朱熹母子の後見を依頼して没した。朱熹、ときに十四歳、紹興十三年のことである。子羽の弟の子翬、同郷の劉勉之、胡憲も朱熹の教育を託された。三人の劉氏は、その後相次いで世を去ったが、朱熹は勉之の娘を妻にしており、彼らに対する思慕は終生変わることはなかった。朱熹の張浚の行状執筆は、こうした背景の中で書かれている。

士大夫官僚史浩の仏教信仰と反戦論（正確には開戦に慎重な国内整備優先論）の関連を考えると参考となる文章に「回奏宣示御製原道辨」（『文集』一〇）がある。孝宗が示した「原道辨」は、韓愈の佛老排除に対し、佛も老も実は同じである、とする。仏教の五戒すなわち不殺は仁、不淫は禮、不盜は義、不飲酒は智、不妄語は信であり、老子の三寶すなわち慈は温良、儉は恭儉、敢えて天下の先を為さずは讓であるから、仏老はすべて聖賢の教えの内に在るという論理である。史浩は、「佛を以って心を修め、道を以って生を養い、儒を以って世を治む」に賛意を表す。しかし「原道辨」が最後に、『大学』の格物致知八条は修心、養生、治世を含むから、わざわざ仏老を持ち出すまでもないとする結論に、仏老の教えの表面しか理解できない人士が、皇帝のこの解説を恰好の根拠として仏老排斥の拳に出ることを懸念し、「又何假釋老之說耶」の「末章」の

削除を願ひ出たのが、この回奏である。二王府教授を務め『尚書講義』『周官講義』『論語講義』など經典の講義録を著わした史浩が熱心な仏教徒でもあったことは、その儒仏同一観があったからではないかと思わせる文章である。この点、北宋の王安石や蘇軾が公一儒私一仏と切り分けたのとやや異なる印象を受けるが、北宋と南宋の士大夫官僚の仏教に対する態度の違いは、興味深い課題である。

以降の南宋史で道学系士人は多くが主戦論を展開した。これに対し史彌遠、史嵩之は史浩の路線を継ぐ主和論者といってもよいであろう。彼らはまた仏教との関係が深かった。儒学一尊で大義名分や復仇論を前面に出す道学系が「原理主義」的傾向に陥りやすいのに対し、仏教徒の側面をもつ史浩は、それらの論理自体は否定しないが、仏教信仰があることで、儒教論理から一步引いて現実を直視する余裕を持ち得たのではなからうか。近年盛んな南宋後半期の政治史研究のなかで、和・戦をめぐる対外政策について論及されることも多いが、こうした観点からの検討も必要かと思われる⁽¹⁵⁾。朱熹を始めたとする道学系士人による張浚名臣化が進むなかで、和・戦問題の歴史叙述も道学派の上書きの結果が今に伝わることになった。南宋に三人の宰相を出した史氏の研究は、その意味でさらなる深化が求められている。

結びに代えて

最後に、以前から気になっていた五百羅漢図が日本に将来された経緯について触れておきたい。いち早くこの絵画の価値に気付き、一八九四年、アメリカでの展覧を開催したフェノロサは、鎌倉建長寺開山蘭溪道隆が一二四六年来日するにもたらしたという伝承を紹介している。初め建長寺ないし寿福寺に納められ、小田原北条氏の下から秀吉が京都に持ち帰ったという日本の記録も、この伝承を肯定しているとされる⁽¹⁶⁾。しかし南宋史研究の立場からいうと、素直に納得できない状況が有る。それは、一二四六年という年は、永らく一人宰相(南宋の宰相は左右丞相の二人)であった史高之が父彌忠の喪に服し明州に滞在していた二年目にあたる。史浩は、孝宗から明州城内月湖畔に邸宅を賜り、そこは史丞相府と呼ばれ当時の地図にも記載される。嵩之が明州のどこに住んだか明らかではないが、父彌忠の墓は東錢湖東北の鄞山に位置し、そこは五百羅漢図が奉納された惠安院から遠くない。嵩之が五百羅漢図の存在を知らなかったとは考えにくく、自分の偉大な伯祖にあたる史浩の遺品ともいうべき五百羅漢図が、海外に流出する事態をみすみす見逃したとは思えない。嵩之も対モンゴル政策においては慎重派であった。関係者が五百羅漢図を手放す理由が見当たらないのである。さらに蘭溪道隆一行は渡航の際、一度難破し船を交換している。五百羅漢図

を日本に持ち込むことは可能であったのであろうか。⁽¹⁷⁾

一方で、蘭溪道隆示寂後、継承者として北条時宗によって招かれた無学祖元の場合、状況証拠は彼による将来を妨げる事情は何もないことを示す。しかし結論からいうと、今のところ、それを裏付ける文献の記載はおろか、示唆する字句すら一字も見出すことはできない。そもそも羅漢図を奉納した史氏一族の宗旨は天台であり、道隆、祖元はいまでもなく禅僧であるから、羅漢図の渡日を彼らに結びつける必然性はない。但し史浩自身、天童寺正覚禅師の黙照禅に親しんでいるから、天台と禅を厳密に分ける必要もない。いずれにしても鎌倉の禅寺に在った記録は、伝承であるが存在し、明州から建長寺に伝来した、その蓋然性は高い。そこでここでは無学祖元の将来を妨げる事情がない、ということの説明して、この問題が新たな歴史の見方を拓いてくれるのではないかと期待を述べる。

第一に、蘭溪道隆は四川出身であり、明州天童寺から日本に出生したことは事実だが、もともと明州との関わりはそれほど強くない。それに対し無学祖元の生家の翔鳳郷は、五百羅漢図の寄進者名を載せる四八幅のうち一二幅に記載があり、しかもそのうちの一幅には祖元の俗姓と同じ翔鳳郷の許氏の姓が寄進者として見える。一二三八年、十三歳で剃髪した祖元が五百羅漢図の存在を知っていたことは当然考えられよう。その後、径山の無準師範に参謁し、各地で参禅を続けた祖元は、一二六二年から七年間、東錢湖東畔の白雲延祥寺住持として過ごす。老母孝養の意があったといわれ、ここも惠安

院から遠くない。一二六九年、杭州靈隱寺から台州真如寺住持となった祖元は、一二七五年、モンゴル軍南下の報を聞き、温州能仁寺に退避する。翌年、臨安が無血開城、皇帝は退位し南宋は滅亡した。その勢いを駆りモンゴル軍は温州に侵攻、避難する人々で混乱するなか一人祖元は寺に留まり、乱入した兵士が振りあげる白刃の下で有名な臨劍頌を偈す。高僧であることを察した兵士は謝して去ったという。議論は多々あるが、事実かどうかはひとまず置き先に進む。翌年、天童寺に戻り、一二七九年二月にモンゴル軍の総攻撃のなか崖山沖で亡命政権の宰相陸秀夫が幼い皇帝を背負って入水し、南宋の命脈が尽きた後の五月、祖元は招請の日本僧らとともに天童寺を離れ日本に向かった。この間、明州城内も戦禍に遭い、焼け落ちた建物も多かったから、関係者が五百羅漢図を避難させようと祖元に託したとしても意外ではない。しかし繰り返すが、それを示唆する記録は何もない。

大宰府を経由して鎌倉に着いた無字祖元は建長寺に入り、北条時宗の帰依を受けた。祖元が来日した前後は、日本が史上初めて東アジア大乱の波をまともに被った時期にあたる。いわゆる元寇である。一二七四年の文永の役を経験した時宗は、一二八一年の弘安の役に前に祖元に心構えを問い、励ましを受けそれを心理的な支えとした。役後の一二八二年、父時頼の菩提所として、また敵味方を問わず元寇戦没者鎮魂のため円覚寺を創建し、帰国を考えていた祖元を開山に迎えた。翌一二八三年、時宗の意向により祖元は円覚寺で千尊地

蔵菩薩を安置して大々的な戦没者供養の法会を挙行している。佛国禅師(祖元) 語録卷九には、このとき唱えられた「賛地藏菩薩普說」の最後が「此軍及他軍戰死。與溺水萬衆無歸魂。唯願速救拔。皆將超苦海。法界了無差。怨親悉平等」であったことを伝える。さらに祖元の書した戦没者追悼の字句を模刻する「蒙古碑」が全国に建てられ、仙台にはその一基が現存し、現在でも祭祀が行われている⁽¹⁸⁾。

この時代、「五百羅漢図」に表れた史浩の戦没者の亡魂を深く祈る心性は、日本でも共振していたのである。「五百羅漢図」の明州から鎌倉への渡来は、その象徴のように思われる。

注

- (1) 『大徳寺伝来五百羅漢図』奈良国立博物館・東京文化財研究所 二〇一四年五月。
- (2) 井手誠之輔「寧波をめぐる場と美術」(『寧波の美術と海域交流』中国書店 二〇〇九年九月)、同「大徳寺伝来五百羅漢図試論」(『聖地寧波』奈良国立博物館 展覧図録 二〇〇九年七月)、同「大徳寺五百羅漢図の成立背景」(『大徳寺伝来五百羅漢図 銘文調査報告書』奈良国立博物館 東京文化財研究所企画情報部、二〇一一年三月)、同、「大徳寺伝来五百羅漢図の背景(承前)」前掲注(1)所載。
- (3) 『佛祖統記』三三三 法門光顯志第一六。「述曰、昔真隱史越王、嘗過金山慕水陸齋法之盛。乃施田百畝、於月波山專建四時水陸、以為報天地君親之舉。且親製疏辭刻石殿壁、撰集儀文刊板於寺。既而孝廟聞而嘉之、賜以水陸無礙道場宸翰扁於殿」。
- (4) 羅翠恂「水陸会における千手観音の役割に関する一考察」『WASEDA』

教文化の展開」所載(大久保良順先生祭壽記念論文集刊行会編 山喜房仏書林 一九九三年)。以下の記述は、前掲井手氏の諸論考、佐藤成順「宋代仏教史の研究」(山喜房仏書林 二〇一二年)「南宋の宰相史浩の補陀洛山観音信仰について」初出二〇〇四年、「南宋の宰相史浩の天台僧外護と功德寺造営について」初出二〇〇五年を参照。

(5) 前掲羅氏論文。『佛祖統記』四七(高宗紹興)四年。偽齊劉豫同金虜入寇、上下詔親征。九月上親詣天竺大士殿、焚香恭禱誓平北虜。既而淮東宣撫使韓世忠、敗金人齊人於承州。世忠獻俘行在、因陳戰沒之人乞加贈恤。上蹙然曰、死於鋒鏑誠為可閔。即勅直學士院胡松年具詞、建水陸大齋以為濟度。是夕也有見鬼神來會甚眾。有夢戰死者感忻然相慶、以為自此得生善趣者。上聞之大説。同五一(高宗)金虜入杭。上親詣上竺大士殿恭禱。為戰沒者修水陸供。有夢戰死者相慶得生善趣」。なお羅氏は、高宗が四年九月に上天竺寺に詣て水陸齋を行ったと解するが、本文で述べるように水陸齋は十月に鎮江で行われた。上天竺寺は戦勝祈願のための行幸である。

(6) 前掲注(4)。『咸淳臨安志』七九 靈芝崇福寺「塑千手眼観音像、作水陸大齋所於寺之西偏」。氏は、この記事が何澹「何参政撰寺記」に拠ることを論証する。但し孝宗の内帑金によって観音道場を建て水陸齋が行われたのは、紹興二年以降であろう。ちなみに孝宗は既に紹興年間には光宗に譲位している。

(7) 『會稽續志』七 雜紀「養素先生」明州定海縣補陀洛迦山、蓋観音大士示現處、遠近致禱或見善財童子・金剛神達摩等相。紹興十八年三月、史越王以餘姚尉攝昌國鹽監、偕鄞陽程休甫、泛海詣山、叩寶洞禮謁、無所親、但感淪茗浮花□□□殊不愜。晡時再往、一僧指巖頂有寶、可以下瞰、**〔公〕** **〔綏〕**而上忽見現金色身、照耀洞府、眉目瞭然。程所親亦然。惟公更見雙齒如玉雪。天將暮、有一長僧來訪、云將自某官歷清要至為太師。又云、公是一好結果底文潞公、它時作宰相、官家要用兵、切須力諫。後二十年、當與公相會於越。遂告去送之、出門俄不知所在。乾道戊子、公以故相鎮越。

一夕、典客報有道人稱養素先生、言舊與丞相接熟。不肯通刺字、疾呼欲入謁。亟命延之。貌粹神清、譚論鋒起。索紙數幅、大書云、黑頭潞相、重漆萬里之風光、碧眼胡僧、會共一宵之清話。遽擲筆不揖而行。公大駭、遍遣兵吏尋覓、不復見。追憶補陀之故、始悟長身僧及此道人、皆大士現身也。相距二十年、淳熙己酉、公正位太師。自道本末云爾。

(8) 史書によって立太子の日が異なる。『宋史』の高宗本紀、孝宗本紀は三十二年五月甲子(二十八日)、『皇宋十朝綱要』二五や『中興小紀』四〇は六月己巳(四日)とする。『要録』二〇〇によれば、五月甲子は高宗が内降の詔で退位と立太子の意向を表明した日で、六月己巳が詔で皇太子を立てた日であるから、正式には六月四日となる。なお『十朝綱要』が内禪を八月丙子とするのは六月丙子(十一日)の誤りであろう。

(9) 周密の道学批判については、拙著『宋代中國科舉社會の研究』II部第三章「宋末元初呉興の士人會」(汲古書院 二〇〇九年、初出二〇〇七年)を参照。周密が朱熹に対しては高い評価を与えていることはそこで述べた。批判は二程以降の道学派、とくに道学を手段に立身出世を図る人物に手厳しい。

(10) 李心傳『朝野雜記』甲二〇「癸未甲申和戰本末」は、関係者の発言の具体的内容はあまり記さないが、海陵王の死から最終的に金軍の撤退した隆興二年十二月までの経緯を簡潔に記す。

(11) 甲斐雄一「南宋の文人と出版文化 王十朋と陸游をめぐって」上篇「状元」王十朋と南宋出版業(九州大学出版会 二〇一六年)参照。

(12) 『王十朋全集』三「論史浩劄子」上海古籍出版社 一九九八年(底本は明正統年間「梅溪先生文集」)。

(13) 「泗海唐鄆四州、皆可取西京中原之地。逆亮來時用兵、僅取得此四州、而湯思退無故與之、惜哉」。朱熹の史浩についてより詳しい記述は、執筆した張浚行状(『朱子文集』九五「少師保信軍節度使魏國公致仕贈太保張公行状」下)にある。ここでは、史浩が張浚の積極策に反対した理由を「浩志專欲亟和、以自爲功」として、史浩を秦檜と同じ主和論者とみなしている。

る。

- (14) 前注「張浚行状」上は張浚幕下での子羽の活動について多くを割いて記述している。『宋史』三七〇本伝。
- (15) 近年の研究動向については、榎並岳史氏の学位論文「南宋理宗朝における動態的政治状況把握の試み―神道碑史料の分析を中心として―」（新潟大学学術リポジトリ <http://hdl.handle.net/10191/17885> 二〇一一年）に整理されている。そこに列挙された文献以降では、小林晃「南宋理宗朝前期における二つの政治抗争―『四明文獻』から見た理宗親政の成立過程―」（『史学』七九―四、二〇一〇年）、方震華「轉機的錯失―南宋理宗即位與政局的紛擾」（『臺大歷史學報』第五三期、二〇一四年）などがある。
- (16) 谷口耕生「木村徳応筆五百羅漢図―失われた大徳寺本六幅をめぐって―」（前掲注②）『銘文調査報告書』に詳しい調査結果が述べられている。
- (17) 高木宗監『建長寺史 開山大覚禪師伝』六七頁（建長寺史編纂委員会編 一九八九年）。
- (18) 無学祖元については、江静『赴日宋僧 無学祖元研究』（商務印書館 二〇一一年）を参照。
- (19) テレングト、アイトル「戦争と鎮魂…元軍戦死者怨霊追善碑をめぐって（下）」（『北海学園大学人文論集』三二、二〇〇五年）。